

寺下前遺跡

— 古鬼怒湾を望むムラ —

調査研究員 山 崎 慧

1. 寺下前遺跡の概要

寺下前遺跡は柏市北部の北西部、田中地区に位置する縄文時代早期から中・近世までの遺構が見つっている複合遺跡である。これまでに21次（令和5年12月現在）にわたる調査が行われている（図1）。

寺下前遺跡を含めた柏市北西部は、千葉県による調査で「柏市北部東地区」として数々の調査が行われており、小山台遺跡（大室小山台遺跡）¹⁾、駒形遺跡、大松遺跡、富士見遺跡、原畑遺跡、宮前遺跡、八反目遺跡、矢船Ⅰ遺跡、矢船Ⅱ遺跡といった遺跡広がっていることが知られている。



図1 寺下前遺跡の範囲と既往の調査箇所

いずれの遺跡も縄文時代前期頃から始まる縄文時代集落が顕著で、古鬼怒湾を望む集落群であると言える。

2. 寺下前遺跡（第21次）の概要

今回実施した寺下前遺跡（第21次）は遺跡範囲の南西隅の部分である。

主に縄文時代中期の遺構を確認した。詳細としては、縄文時代中期の住居址が6軒、フラスコ状土坑が20基、その他土坑が10基、トンネル状遺構（開口部）が2基、古墳時代住居址が2軒検出された。

出土遺物は主に阿玉台Ⅰb式から加曽利E1式期までの土器や石斧、古墳時代中期の土師器、石製模造品が出土した。

縄文土器はその大半が深鉢形土器であるが、浅鉢形土器や土器台も出土している。住居址のみでなく、フラスコ状土坑からも完形の土器が複数出土しており（写真1・2）、貯蔵穴としての機能が見られる。

古墳時代住居址の1号住居跡は火災住居と思われる、住居床面付近から遺物が確認されたほか、住居の中心付近に向かい放射状に炭化した屋根材が出土した（写真3）。

3. 寺下前遺跡と小山台遺跡

寺下前遺跡の西側には、遺跡範囲を隣接させる小山台遺跡が広がる。小山台遺跡は、73,399㎡に及ぶ調査が千葉県文化財センターによって行われており、縄文時代早期から遺構が確認されている（図2）。縄文時代中期には大規模な環状集落が二ヶ所形成される。

中・近世には方形周溝区画墓や土坑墓群が確認されるほか、堀が確認されており、吉祥院との関係が

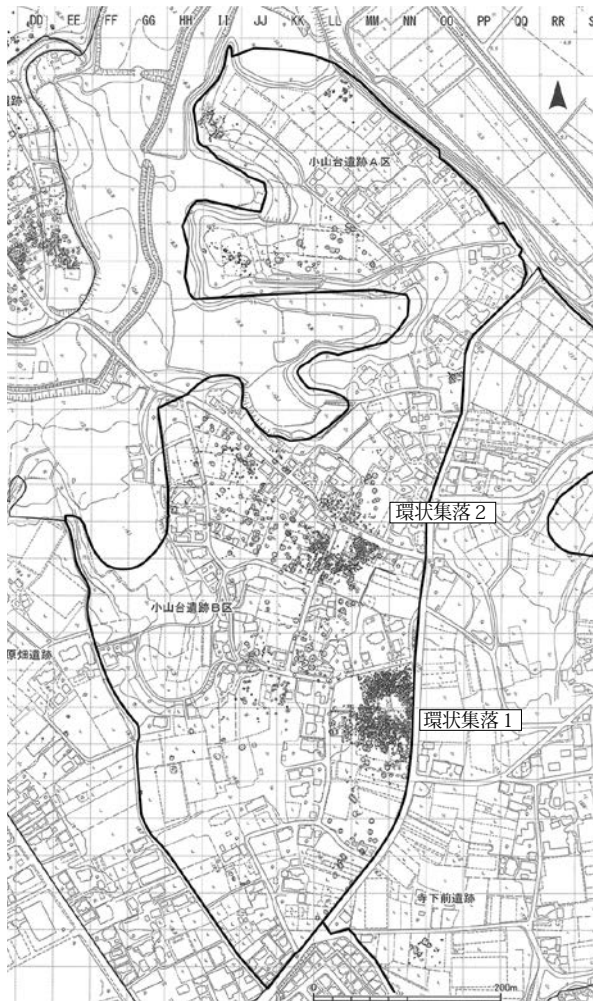


図2 小山台遺跡の範囲と遺構配置

注目される。

小山台遺跡の縄文時代遺構群で特出するべきは、先述したB区で確認された二ヶ所の環状集落である。それぞれの環状集落は南東側の遺構密度の高い集落が環状集落1、北西のやや遺構密度が低い集落が環状集落2と呼称されている（千葉県教育振興財団 2019）。

環状集落1は、その東側部分が寺下前遺跡に広がっており、小山台遺跡と寺下前遺跡が縄文時代においては同一の集落の生活範囲であったことがわかる。寺下前遺跡と小山台遺跡の縄文時代に該当する遺構も、その初源から同時期のものである。

今回は小山台遺跡の発掘調査報告をベースに寺下前遺跡を含めた遺跡の動態を見てみる。

両遺跡は早期から生活の痕跡は確認されるものの、中期には遺構数が増加する。

阿玉台Ⅰb式期には遺構数が少ない。遺構は環状集落2付近に多いようである（図4）。

阿玉台Ⅱ式期に遺構数が増え、環状集落2の周辺の遺構が増加する。また、遺構の範囲が寺下前遺跡側にも南側にも広がる。阿玉台Ⅱ式から阿玉台Ⅲ式期の過渡期にも同様である。このような傾向は北総台地上にはよく見られる傾向である（図5）。

阿玉台Ⅲ式期には環状集落1、環状集落2ともに遺構が集中し、環状集落の形成期であるとわかる。環状集落1は特にその傾向が顕著である（図7）。

阿玉台Ⅰb式から阿玉台Ⅲ式期までは環状集落形成までの過程と見ることができるが、いずれの時期も環状集落にまとまらない遺構群がある。これらの範囲は小山台遺跡B区の北西に突き出した舌状台地に先端部に向かって伸びている。

阿玉台Ⅳ式期から加曽利E1式の古段階までの遺構は基本的に環状集落1、環状集落2に集約されている。ただ、阿玉台Ⅱ式期に寺下前遺跡南部に広がった遺構範囲は健在で今回調査範囲では阿玉台Ⅳ式期と判断される遺構が多く見られる（図8）。

加曽利E1式新段階・加曽利E2式期では、古段階と大きな変化はなく、基本的には各環状集落に遺構が集中する（図9・10）。

加曽利E3式期には、遺構数が急増する。環状集落2は、遺構の分布からはその姿が確認できなくなる。環状集落1は健在である。遺構は環状集落1以北特に北西方向に広がるようになる（図11）。

加曽利E3式期から加曽利E4式期にかけての遺構は、やはり環状集落1以北に広がるが、寺下前遺跡北部にも遺構が確認され、半島状の台地全体に遺構が広がっている（図12）。

加曽利E4式期には、環状集落1の周辺のみ遺構が確認されている（図13）。

上記のように、加曽利E1～E4式期のここまで大きな集落が見つかることは珍しく拠点的な性格が伺える。

以上のことから、寺下前遺跡および小山台遺跡の集落は、縄文時代前期まで半島状の台地に広く分布していた遺構群が阿玉台Ⅲ式までに環状集落の形成

に伴い台地中心部に集約されていき、加曽利 E 2 式期まで環状集落が営まれる。加曽利 E 3 式期には環状集落 2 が衰退し、大きくは環状集落 1 と周縁の遺構群に別れる。加曽利 E 4 式期には環状集落 1 周辺にのみ遺構が確認され、環状集落 1 も徐々に衰退していくものと見られる。

4. 柏市北部東地区の遺跡との関係

前述の通り、柏市北西部の柏たなか駅周辺の台地上には、縄文時代の集落が広がっている。寺下前遺跡と小山台遺跡の占地している半島の台地の西側には、谷を挟んで半島状の台地がある。この台地上には、大松遺跡・駒形遺跡・富士見遺跡が広がる。

半島状の台地基部から北側の谷津の西側を範囲とする富士見遺跡には、縄文時代前期から中期、後期にわたる遺構が確認されている。縄文時代中期の遺構は加曽利 E 式期の住居址が B 地区に 1 軒、E 地区に 1 軒検出されたのみである。

駒形遺跡は半島状の台地の北部に占地する。縄文

時代早期から縄文時代後期の遺構が広がる。この遺跡からは前期段階の遺構は検出されるものの、中期の遺構は検出されず、遺構外から遺物が検出されるのみである。

大松遺跡は、半島状の台地の中央から東側に伸びる舌状台地上に占地する。縄文時代前期から中期にかけて集落が営まれる。縄文時代中期の遺構は、前期五領ヶ台式に始まり、中期加曽利 E 3 式期まで確認されている。五領ヶ台期の遺構はごく僅かだが、阿玉台Ⅳ式から加曽利 E 1 式にかけて遺構数が増え、舌状台地の先端部に環状集落を形成する。この環状集落は、加曽利 E 2 式期ごろには衰退している。

以上のように西側の半島状台地上の集落は、前期段階から始まり中期に大松遺跡の環状集落に集約される。その後、加曽利 E 2 式期まで営まれ衰退する。

小山台遺跡の環状集落 1、環状集落 2 の存続期間は、環状集落 1 が阿玉台Ⅲ式期に顕在化し、加曽利 E 4 式期には衰退、環状集落 2 は阿玉台Ⅲ式期に顕在化し、加曽利 E 3 式期には衰退する。大松遺跡の環状集落は前述の通り阿玉台Ⅳ式期に顕在化し、加曽利 E 2 式期に衰退する。

集落の構造からも比較を行なってみる。それぞれの環状集落は、いずれも中央部に遺構を配置しない空閑地を持ち、その一列外側に土坑群、さらに外側に住居が列をなして確認されている。小山台遺跡環状集落 2 は北側に未調査部があるが、集落の構造は同様と判断できる。ただし、遺構の数には大きな違いがある。

小山台遺跡環状集落 1、小山台遺跡環状集落 2、大松遺跡では、住居跡一軒に対する土坑の数が、6.3 基 / 軒、4.8 基 / 軒、2.7 基 / 軒である。

このことから、両台地上の三つの環状集落は大松遺跡の存続期間がやや短く、ほぼ同時期に成立し、ほぼ同様の時期に衰退する。三つの集落は小山台遺跡環状集落 1 が、より拠点的な性格が強い集落であると思われる。

このことから、谷を挟んで東西に存在した三つの集落は連動して営まれていたことがわかる。



図3 富士見遺跡・駒形遺跡・大松遺跡

5. 柏市北部東地区の遺跡の特殊性

環状集落の形成は、貝塚の形成と関連づいている。これは縄文中期の食性と関係があるということである。縄文海進と呼ばれる海面上昇により、海岸線は現在よりも内陸部まで入り込んでいた。その時期の霞ヶ浦・印旛沼・手賀沼・鬼怒川などの水系を「古鬼怒湾」という。柏市北部東地区は古鬼怒湾の最奥部に当たる。

県内の他の環状集落の多くでは、貝塚が見つかるが、柏市北部東地区を含む古鬼怒湾の奥に位置する集落では、貝塚が確認されない。食料の問題から考えても、これは特徴的な状況と言える。

註

- 1：柏市の発行物内で表記が二通りあり併記したが、本文中では小山台遺跡で統一する。
- 2：図1～3は各報告書より引用し、図4～13は筆者が作成した。

参考文献

- 印旛都市文化財センター 2023 『寺下前遺跡（第21次）』印旛都市文化財文化財センター発掘調査報告書第387集
- 千葉県教育振興財団 2009 『柏市北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書2－柏市駒形遺跡－ 縄文時代以降編1』千葉県教育振興財団調査報告書第616集
- 千葉県教育振興財団 2011 『柏市北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書4－柏市大松遺跡－ 縄文時代以降編1』千葉県教育振興財団調査報告書第666集
- 千葉県教育振興財団 2014 『柏市北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書6－柏市富士見遺跡－ 縄文時代以降編1』千葉県教育振興財団調査報告書第728集
- 千葉県教育振興財団 2019 『柏市北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書15－柏市小山台遺跡B区－ 縄文時代以降編』千葉県教育振興財団調査報告書第775集

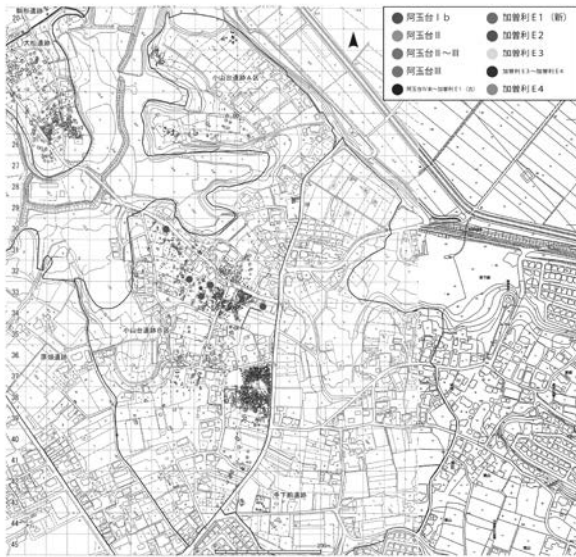


図4 阿玉台 I b 式期の遺構配置

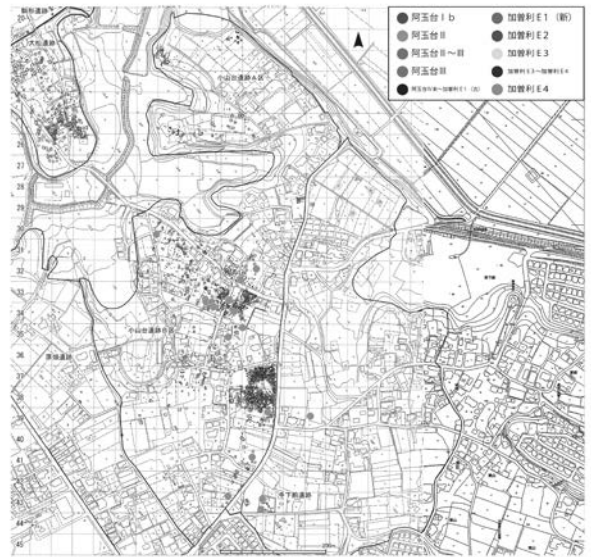


図5 阿玉台 II 式期の遺構配置

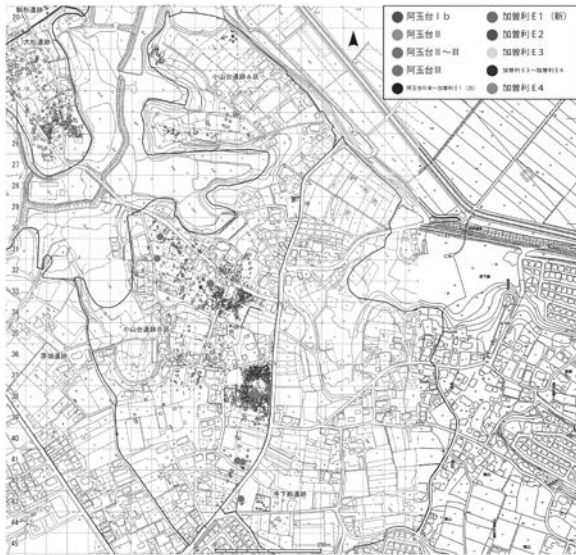


図6 阿玉台 II ~ III 式期の遺構配置

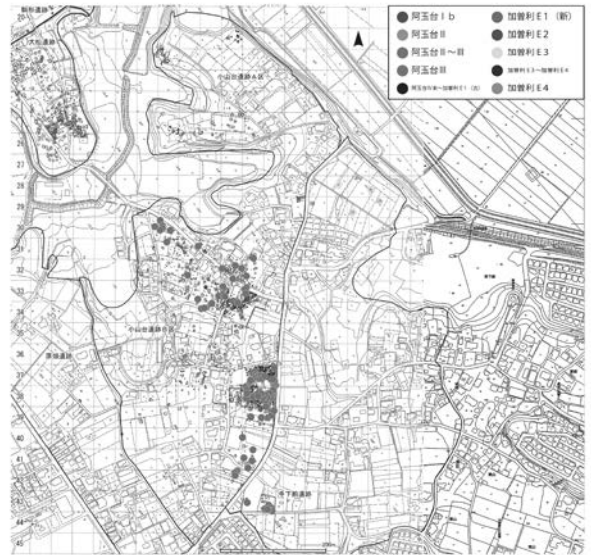


図7 阿玉台 III 式期の遺構配置

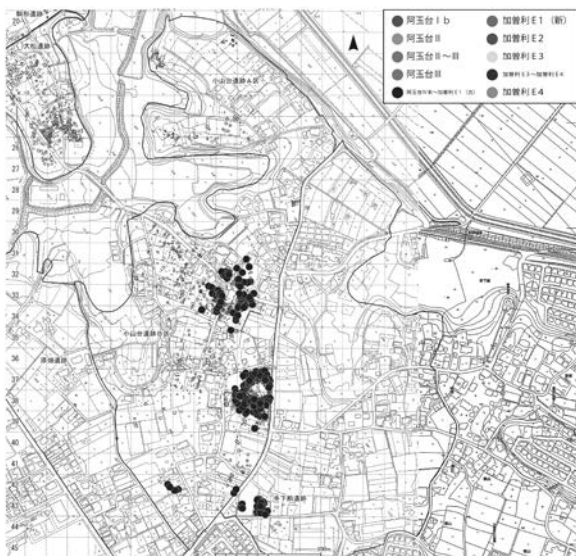


図8 阿玉台 IV 式～加曽利 E1 式古段階期の遺構配置

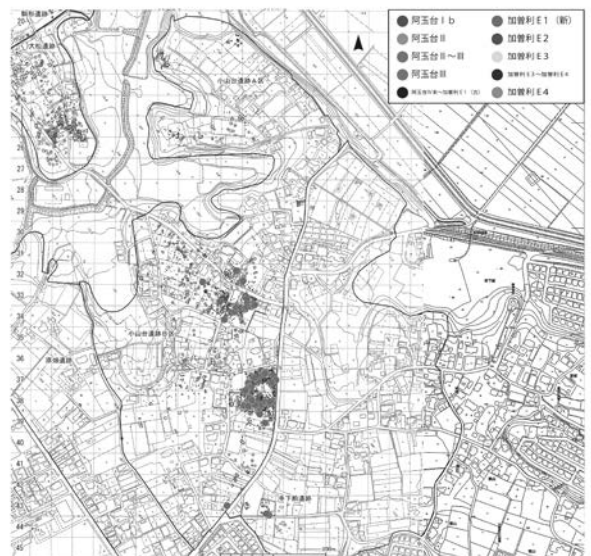


図9 加曽利 E1 式新段階期の遺構配置

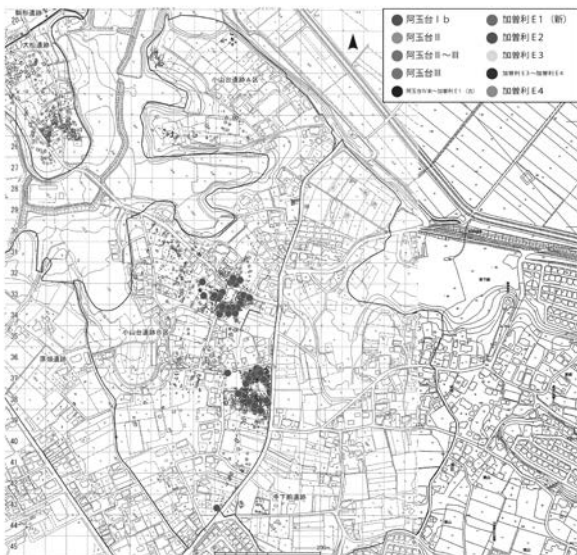


図10 加曽利E2式期の遺構配置

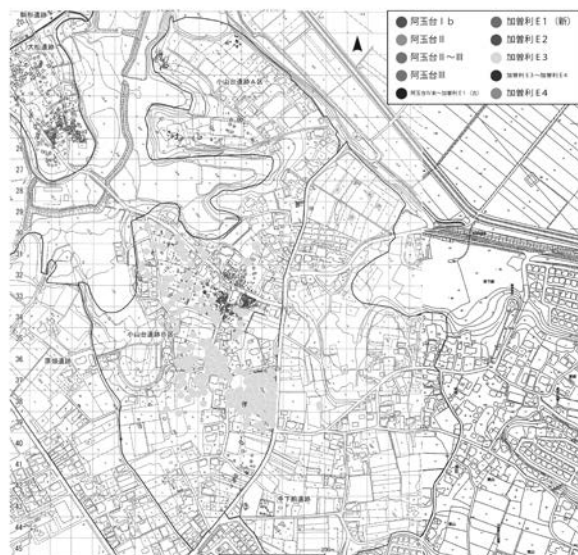


図11 加曽利E3式期の遺構配置

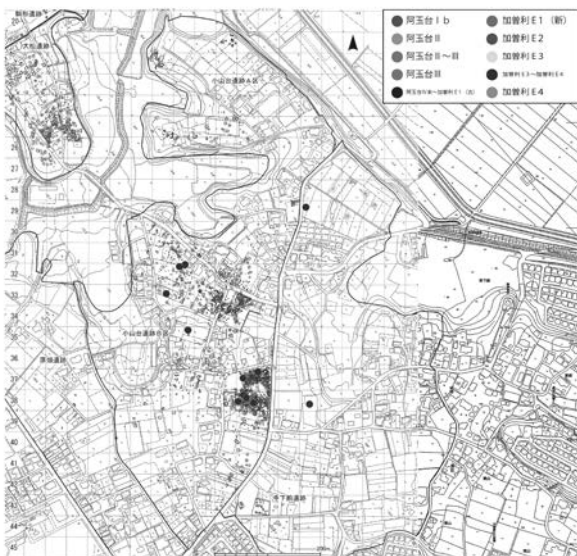


図12 加曽利E3式～加曽利E4式古段階期の遺構配置

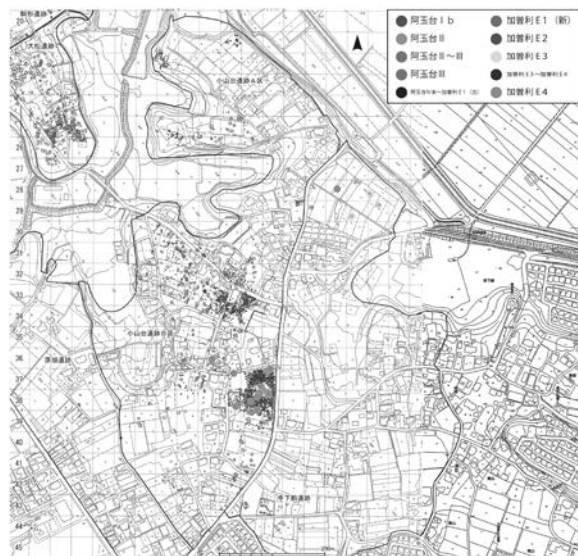


図13 加曽利E4式期の遺構配置



写真1 26号土坑出土状況



写真2 24号土坑出土状況



写真3 1号住居跡検出状況